親子ひろしま訪問団

2014 年訪問の記録

平成 26 年（2014 年）8月5日～7日

神奈川県秦野市

目　次

はしがき　・・・・・・・・・・・・・・・・・1

1　訪問の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・3

2　訪問団員(参加者)の声　・・・・・・・・・・・・・・・14

3　団員名簿　・・・・・・・・・・・・・・・・20

4　訪問団規約　・・・・・・・・・・・・・・・・21

5　資　料

（1）秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文・・22

（2）広島市平和宣言　・・・・・・・・・・・・・・・23

（3）こども代表「平和への誓い」　・・・・・・・・・・・26

（4）広島平和記念公園・周辺ガイドマップ　・・・・28

◆訪問団の主なスケジュール

日　時	項　目	主な内容
7月22日(火) 午前11時～11時半	結団式 副市長表敬訪問	市長メッセージ・千羽鶴の受け渡し 場所：秦野市役所議会第１会議室
8月5日(火) ～ 8月7日(木)	広島訪問	①　原爆の子の像への千羽鶴の奉納 ②　広島平和記念資料館見学 ③　平和記念式典 参列 ④　被爆体験聴講 ⑤　平和記念公園内碑めぐり ⑥　とうろう流しの参加 ⑦　宮島見学
8月15日(金) 午前9時半～10時	報告会	副市長への訪問団事業の報告 場所：秦野市役所市長応接室

はしがき

広島・長崎で原爆が投下され、多くの尊い命が奪われてから、６９年が経ちました。今でも原爆の後遺症や心の傷で苦しむ方がたくさんいる一方で、復興の努力の中、平和を訴えてきた戦争体験者は減少の一途をたどり、悲惨な記憶の風化が進行しつつあります。また、現代社会の中でも、いじめや虐待、殺人により尊い命が奪われるといった悲しい報道が毎日のように流れ、世界にはいまだ紛争が絶えず、私たちが希求する平和な社会と言える状況にはないように思われます。

戦後５０年を契機に始まったこの「親子ひろしま訪問団」は、今年で２０回を迎えました。これまで、１８４人の親子が広島を訪問してきました。今年の広島は、例年のうだるような暑さと異なり、最初の２日間は雨模様の天気となりました。４３年ぶりの雨天開催となった平和記念式典は、いつもは賑やかな蝉の鳴き声もなく、雨音が静かに響いていました。６９年前のこの日、この場所で、原爆が一瞬にして多くの人々の生活とその尊い命を奪ったことを思うと、言葉もありません。

戦争を起こしたのも人間、傷つき立ち上がって生きるのも人間。「人が人を傷つける」という出来事がたびたび報道されている昨今、訪問団員１０名にとって、原爆ドームや平和記念資料館の見学、平和記念式典への参列、被爆体験談の聴講などの経験は、改めて平和であることや命の重みを考える大変良い機会となったと思います。

秦野市では、核兵器廃絶・非核三原則の堅持、恒久平和を柱とした「平和都市宣言」を定め、また、広島・長崎両市が主導する「日本非核宣言自治体協議会」や「平和首長会議」に加盟し、平和への思いを発信しています。

平成２０年６月には、市民一人ひとりが改めて平和の大切さや命の尊さを考える機会として、８月１５日を「平和の日」と制定しました。毎年、「平和の日」を絡めた日程で、市民が主体となった様々な平和事業を展開しています。

また、平成２１年８月には、市役所に「平和の灯モニュメント」を市内事業所の協力を得て、自治体としては全国で１４ヶ所目、神奈川県内では初めて設置しました。このモニュメントの種火は、「親子ひろしま訪問団」が広島平和記念公園から採火し持ち帰った炎を、「平和のシンボル」としてともし続けています。

今年、訪問団が広島に届けた千羽鶴はおよそ１万７千羽に上りました。一羽一羽、平和への思いを胸に丁寧に折っていただいた多くの市民の皆様に、心からお礼を申し上げます。抱えきれないほどの千羽鶴の重さに、鶴を折られた皆様の思いを感じながら、心

を込めて鶴を捧(ささ)げました。

平和記念式典の参列や被爆体験談の聴講などの貴重な経験を含め、被爆地・広島で見聞し学んだことを、団員一人ひとりが心に刻み込み、その思いを多くの人々に伝え、また次代へと語り継いでくれることを心より願います。

秦野市くらし安心部市民自治振興課

１　訪問の概要

(1) 訪問１日目・８月５日（火）

７：５０　集合（小田原駅）

８：０９　小田原発

１１：４５　広島着

１４：００　広島平和記念公園到着

千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納

１４：５０　広島平和記念資料館見学

「原爆の子の像」の前で千羽鶴とともに

原爆の子の像

この像のモデル佐々木禎子（ささきさだこ）さんは、２歳の時に爆心地（ばくしんち）から１．７ｋｍの自宅で被爆した。足が速く、とても元気な子だったが、小学６年生の時に原爆症（げんばくしょう）を発症（はっしょう）した。入院中、鶴（つる）を千羽折れば病気が治ると言われ、信じて折り続けたが、中学校に入学できずに亡くなった。

「原爆の子の像」は禎子さんが通った小学校の同級生たちの呼び掛けにより、全国の学校や外国からの支援により建てられた。

平和な未来への夢を託す少女の像

原子力の研究でノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹（ゆかわひでき）博士は、この子供たちの気持ちに感動し、博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫（ほ）られた鐘（かね）を寄贈（きぞう）した。その鐘の下に金色の折り鶴がつるされ、風鈴（ふうりん）式に音が出るようになっている。この鐘と金色の折り鶴は平成１５年に複製（ふくせい）されたもので、オリジナルは広島平和記念資料館に展示されている。

同年代の禎子さんを思い、鐘を鳴らす

訪問団は、広島到着後、市民から託（たく）された１万７

千羽の千羽鶴を手に広島平和記念公園へ向かい、原爆の子の像に捧げた。平和記念公園には世界中から大勢の人々が集まり、原爆の子の像にもたくさんの千羽鶴が奉納されていた。

平和記念公園

この地域は、元々は広島でも有数の繁華街だった。しかし、爆心地に近かったため、原子爆弾投下により壊滅した。

その後、１９５４（昭和２９）年に平和を祈念し、建築家の丹下健三氏の手により公園として生まれ変わった。

園内には平和記念資料館をはじめ、原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、平和の灯、平和の鐘など多くの碑やモニュメントなどが設置されている。

雨の中翌日の式典準備が行われる記念公園

毎年、原子爆弾が投下された８月６日には「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（平和記念式典）」が開催され、夜には元安川をはじめ市内６つの川で犠牲者を慰霊する「とうろう流し」が行われている。

平和記念資料館

平和記念資料館は、被爆の実相を伝え、核兵器のない平和な世界の実現に貢献するため設置された。本館と東館の２つの建物からなり、東館では、被爆までの広島の歴史や原子爆弾の開発から投下までの経緯、現在の核兵器の状況を、本館では、被爆者の遺品や高熱で融けた瓦等の被爆資料を展示している。

また、核実験への抗議文を展示してあり、その数は６００通以上、人類最初の被爆地として、強く、地道に訴えを発し続けている。

本やテレビで見るのとは違った生々しい展示は、静かに、そして強く、訪問団員の心に戦争や原爆の悲惨さを訴えかけた。

真剣に展示資料に見入る団員

⑵　訪問2日目・8月6日（水）

８：００　　原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式参列

９：３０　　被爆者体験談の聴講

１４：３０　　平和記念公園内の碑めぐり

２０：００　　とうろう流し参加

それぞれの平和への思いをとうろうに込めた

原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

毎年８月６日に、被爆者、政府・自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列（さんれつ）し、原爆死没者の冥福（めいふく）と恒久の平和を願って行われる。

午前８時ちょうどに開会し、広島市長と遺族代表が、原爆死没者名簿（げんばくしぼつしゃめいぼ）を原爆慰霊碑（げんばくいれいひ）に納（おさ）めた。

「平和宣言」を読み上げる松井広島市長

この一年間に新たに亡くなったり、死亡が確認されたりした被爆者は５，５０７人。名簿搭載者（とうさいしゃ）の総数は２９２，３２５人に、名簿の数は１０７冊となった。

原爆が投下された午前８時１５分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼（あいとう）と不戦の誓（ちか）いを新たにした。

黙とう後、松井一實（まついかずみ）広島市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「平和宣言」が発信された。広島市は、１９９８（平成１０）年から核兵器保有国の駐日（ちゅうにち）大使（たいし）の式典への参列を求める取組みを開始し、今年は、昨年１１月に就任したアメリカのキャロライン・ケネディ駐日大使を含む６８か国と欧州連合代表らが参列した。

松井広島市長は平和宣言で、世界の指導者（しどうしゃ）へ向けて、威嚇（いかく）ではなく対話による安全保障体制（あんぜんほしょうたいせい）への転換（てんかん）を訴えるとともに、日本政府に対し、核兵器廃絶に向けて国際社会との連携（れんけい）強化を求めた。

訪問団は、初めて参列する式典の、テレビで見るのとは異なる厳粛（げんしゅく）な雰囲気に緊張しながら、参列する多くの被爆者、及びご遺族とともに黙とうを捧げた。子ど

もたちは、広島市長や内閣総理大臣のあいさつ、同年代であるこども代表の誓いの言葉に真剣な表情で耳を傾け、平和への思いとこの貴重な経験を、心に刻み込んだ。

原爆死没者慰霊碑

平和記念公園の中央に位置する、古墳時代の家形埴輪に似たデザインの碑で、中央の石室には原爆死没者名簿が納められている。碑の正面には、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」という言葉が刻み込まれている。

この静かで短い言葉には、原爆死没者への哀悼と、戦争という過ちを二度と繰り返さないという平和への願いと誓いが込められており、見る者の心を打つ。

原爆慰霊碑、祈りの泉、嵐の中の母子像、資料館、平和の灯は、一直線で結ばれるように設計されている。

直線上に原爆ドームが見える設計になっている

平和の灯

建立は、１９６４（昭和３９）年８月１日。当時、東京大学の教授だった丹下健三氏の設計により、全国１２宗派から寄せられた「宗教の火」や溶鉱炉などの全国の工場地帯から届けられた「産業の火」が、１９４５（昭和２０）年８月６日生まれの７人の女性により点火された。

建立の目的は「水を求めてやまなかった犠牲者を慰め、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求するため」。この火は、点火された日以来ずっと燃え続けており、「核兵器が地球から姿を消す日まで燃やし続けよう」という反核の象徴である。

秦野市にも分けられた平和の灯

秦野市では、平成２１年８月６日に、平和の象徴として、市役所本庁舎玄関横に「平和の灯モニュメント」を設置したが、親子ひろしま訪問団がこの「平和の灯」から採火した火を持ち帰り、ともし続けている。

被爆体験談聴講

平和記念式典参列後、講師の増岡清七さんより被爆体験のお話を伺った。増岡さんは、被爆当時の状況やその時の恐怖について子どもたちにも分かるよう丁寧に話し、その言葉は、戦争そして原爆の恐ろしさ、平和の大切さを訪問団に静かにしかし強く訴えかけた。

【被爆体験談（増岡清七さんのお話から抜粋）】

１９４５(昭和２０)年８月６日は、建物疎開作業のため、約８，３００人の中学生が作業をしていた。学徒動員令により当時の中学生は、夏休みもなく工場等で作業や建物疎開に従事することになっていた。

建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぎ、住民の避難場所のために建物を壊し、空き地をつくることで、当時、県庁や市庁舎周辺は建物疎開で空き地となっていた。当日、増岡さんら３年生の半数の７０人は、爆心地から約１ｋｍの場所で、引率の先生の話を聞いていた。

午前８時１５分、突然、左からの風で押し上げられ、地面にたたきつけられた。そのまま意識を失い、原爆特有の「ピカ（光）ドン（音）・きのこ雲」の記憶はなかった。

意識が戻り、見回すと夜のように真っ暗な中、空から火が降って見え、悲惨な状況が広がっていた。原爆が落ちたと知ったのは後のことだった。

生き残った学友たちを見ると、みんな皮膚が垂れ下がり、一見誰だかわからないほどの形相だった。皮膚が熱で剥がれ、爪のところで止まり、垂れ下がっていた。

増岡清七さん（広島市在住）

爆心地から約1kmで被爆。当時中学3年生。

戦後、高校で教鞭をとっていたが、退職後、「被爆語り部」として、反核・平和を訴え続けている。

現在、「広島県高等学校被爆教職員の会」会長。

増岡さんも左顔面や腕など皮膚が垂れ下がっていた。何が起こったのか、どこが安全なのかもわからないまま、爆心地から市外へ必死で逃げた。炎に焼かれ、死に逝く人たちを見ながら、とにかく「死にたくない」一心で逃げた。「生きたい」ではなく「死にたくない」という気持ちで。「生きたい」には希望があるが、「死にたくない」は絶望の中で感じること。広島の市

街が炎で燃え上がっている中「死にたくない」とたどり着いた防空壕には、人が重なり合い、あふれていた。

瀕死の状態で、水や家族を求めていた。木陰でそのまま眠ってしまったところを翌日、救助隊の馬車で市外の民家の座敷に運ばれた。すでに多くの人が丸太のように横たわっていた。この時、初めて汚い布で患部を拭いたが、治療はされなかった。

増岡さんの話に、真剣にメモを取る団員たち

翌日、汚い茶碗にお粥が１杯置かれたが、皮膚の膿で、左目と口が開かず、食べるのに困った。皮膚が垂れ下がった左顔面や腕に、太陽の光が当たると、針でチクチク刺すような痛みが続いた。数日後、行方を必死で探してくれた父親と再会し、荷車に載せられ親戚宅に行った。

その時は、増岡さんの体を気遣って教えられなかったが、自宅は全壊、母親は即死していたと、後に父親から伝えられた。療養のための旅行で留守にして死を免れた父親も翌年、増岡さんが１５歳のときに亡くなった。恐らく、増岡さんの行方を探すために原爆投下直後の広島の街を歩いて回る中で、残留放射能を浴びてしまったためと思われる（入市被爆）。火葬する設備がなく、自分自身で荼毘に付した。既に兄は特攻隊員として沖縄で戦死しており、家族は姉と２人きりになってしまった。

学友たちも多くが原爆により亡くなったが、そのうちの一人の遺品が、平和記念資料館に展示されている。

原爆ドーム

後に「原爆ドーム」と呼ばれるこの建物は、１９１５（大正４）年に広島県の物産品の販売促進を図る拠点として建設され、建設当時は「広島県物産陳列館」という名称だった。その後、「広島県産業奨励館」と改称されたが、県下の物産品の展示・販売を行うほか、博物館、美術館としての役割も担っていた。

しかし、戦争が激しくなった１９４４（昭和１９）年３月、産業奨励館としての業務が廃止され、内務省中国・四国土木出張所や広島県地方材木・日本材木広

島支社など統制会社の事務所として使用されていた。

設計者はチェコの建築家ヤン・レツル氏で、構造は一部鉄骨を使用したレンガ造り、石材とモルタルで外装が施されていた。全体は３階建てで、正面中央部分に５階建ての階段室、その上に銅板の楕円形ドームがのっていた。

爆心地から約２００ｍの場所に位置し、原爆投下により爆風と熱線を浴びて大破し、天井から火を吹いて全焼した。爆風がほとんど垂直に働いたため、本館中心部は奇跡的に倒壊を逃れたものの、館内にいたすべての人々は即死している。

平和、そして核兵器廃絶の象徴である原爆ドーム

鉄骨部分がむき出しの残骸と化し、いつからともなく「原爆ドーム」と呼ばれ、１９９６（平成８）年に世界遺産へ登録された。

静かに佇む原爆ドームの姿は、平和記念資料館で原爆に関する様々な資料を見た訪問団に、同じような悲劇を繰り返してはいけないと改めて強く感じさせた。

平和記念公園内の碑めぐり

平和記念公園及びその周辺には、原爆犠牲者の慰霊碑など、５０を超える原爆関連の記念碑や記念建造物がある。訪問団は２グループに分かれ、ボランティアガイドの案内を受けながら平和記念公園内の碑めぐりを行った。

被爆したアオギリ

爆心地から約１．５キロ離れた東白島町にあった当時の広島逓信局の中庭に、３本のアオギリの木が植えられていた。

原爆の投下によって、熱線と爆風をまともに受けた３本のアオギリは、枝葉が全て無くなり、爆心地側の幹の半分が焼け焦げた。

しかし、枯れ木同然だったアオギリは、翌年の春、奇跡的に新芽を出し、その姿は、原爆投下と敗戦によって

ガイドさんの丁寧な説明を受ける

疲弊(ひへい)した人々の心に、生きる勇気と希望を与えた。

その姿で原爆の被害を訴え続けるアオギリ

１９７３（昭和４８）年、当時の中国郵政局（かつての逓信局）の建て替えに伴い、平和公園内の現在の場所に移植された。３本のうち１本は枯れてしまったが、この被爆したアオギリの種子は国内外に贈られ、「被爆アオギリ２世」として大切に育てられている。

峠三吉詩碑

峠三吉(とうげさんきち)さんは、爆心地から約３キロ離(はな)れた自宅で被爆した。その体験を文学の活動を通して発表し、原爆反対、平和擁護(ようご)の作品を数多く残した。その代表作である「原爆詩集」は、世界的な反響(はんきょう)を与えた。

平和記念公園内の碑文には、次のような詩が刻まれている。

「 ちちをかえせ　ははをかえせ
　としよりをかえせ　こどもをかえせ
　わたしをかえせ
　わたしにつながるにんげんをかえせ
　にんげんの　にんげんのよの
　あるかぎり
　くずれぬへいわを　へいわをかえせ
　　峠　三吉　」

峠三吉詩碑にもたくさんの千羽鶴が捧げられている

マルセル・ジュノー博士記念碑

人道的立場から、被爆者救護(きゅうご)に尽力した博士の功績(こうせき)を称(たた)え、１９７９（昭和５４）年に建立された。

当初、連合軍捕虜(ほりょ)の動静調査のために来日したジュノー博士は、原爆被害の惨状を知り、直ちに占領軍司令部（GHQ）に救援を要請し、交渉の末、大量の医薬品を調達し広島に届け、自らも被爆者の治療に当たった。「ヒロシマの恩人」と呼ばれている。

韓国人原爆犠牲者慰霊碑

終戦時、日本には約３００万人の朝鮮人がおり、数万人が広島市内で被爆したといわれている。

多くの花が手向けられた慰霊碑

「死者の霊は亀の背に乗って昇天する」という故事にならって、亀を形どった台座の上に碑柱が建ち、その上に二つの竜を刻んだ冠が載せられている。

碑は、当初、軍人であった朝鮮王家の一族李殿下が司令部への出勤途中に原爆投下に遭い、その後発見された場所付近ということから、本川橋西詰めに建立された。

その後、各方面からの強い要望により、１９９９（平成１１）年７月に平和記念公園内に移設された。慰霊碑の石は、国に帰れなかった人々への思いから、ふるさと韓国の石が使われている。

原爆供養塔

爆心地に近いこの付近には、被爆後、遺体が散乱し、また、川から引き上げられたものなど、無数の遺体が運ばれ、荼毘にふされた。

犠牲となられた方のご冥福を祈る

１９４６（昭和２１）年、市民からの寄付により、仮供養塔、仮納骨堂、礼拝堂が建立され、その後、１９５５（昭和３０）年に、広島市が中心となり老朽化した納骨堂を改築し、各所に散在していた引き取り手のない遺骨もここに集め納めた。身内の見つからない遺骨や氏名の判明しない遺骨約７万柱が納められている。

毎年８月６日には、さまざまな宗教・宗派合同の供養慰霊祭が営まれている。

平和の鐘

核兵器と戦争の無い平和な世界の達成を目指し、その精神文化運動のシンボルとして建立された。この鐘の音を広島から世界の隅々まで響き渡らせ、全人類の一人ひと

りの心にしみわたらせることを願い、訪問者が自由に鐘を鳴らせるようになっている。

鐘は、梵鐘の分野で重要無形文化財保持者（人間国宝）である香取正彦が制作し、表面には「世界は一つ」を象徴する国境の無い世界地図が浮き彫りにされている。

平和な世界を願い、平和の鐘をつく

撞座は、原水爆禁止の思いを込めて原子力のマークがデザインされており、鐘楼の周囲の池には大賀ハスが植えられている。

被爆当時、ハスの葉で傷を覆い、火傷の痛みをしのいだという被爆者の霊を慰めたものである。

とうろう流し

原爆は一瞬にして多くの命を奪った。そして、即死を免れてもひどい火傷を負った人たちが大勢いた。その人たちの多くは、その熱さと痛みに耐えかねて近くの川に次々に身を投げ、川面には遺体が浮き、川底にも遺体が沈んでいたという。

戦後、駅前を中心にヤミ市がにぎわい、中心部にバラック建ての商店が建ち始めた昭和２３～４年ごろ、親族や知人を原爆で失った遺族や市民たちが追善と供養のため、手作りの灯篭を川に流したのが、「とうろう流し」の始まりと言われている。

とうろうに書くメッセージを真剣に考える団員

灯篭には、亡くなった方の名前と流した人の名前を書き込むのが一般的だが、最近は「平和への思い」が書かれる光景も目立つ。長い歴史を持つ「とうろう流し」は、慰霊とピースメッセージの両方の意味を持つようになった。毎年、８月６日の夕刻から元安橋の上流から流される。

広島訪問２日目を終えた訪問団１０人は、平和施設見学や平和記念式典出席を経て感じたそれぞれの平和への思いを乗せて、灯篭を流した。

⑶ 訪問3日目・8月7日（木）

９：３０　　広島駅発

１０：４０　　世界遺産「厳島神社（いつくしまじんじゃ）」着

１６：５２　　広島駅発

２０：３６　　小田原駅着・解散

世界遺産・宮島「厳島神社」を見学

２　訪問団員（参加者）の声

(1)　訪問前の感想

●道徳の授業の時間に、先生が、１度原子爆弾を落とされただけで、何千度もの熱が押し寄せてきて、何万人もの人が亡くなったと聞いて、訪問団参加に興味を持ちました。

７月の結団式で団員に手渡された千羽鶴

●若い世代にも、戦争の恐ろしさや平和の尊さを学んでもらうことが大切だと感じています。

●昭和２０年８月６日に広島に原子爆弾が投下され、多くの方々が亡くなられた事実は、平和な社会に生きる我々にとって本の中の出来事でしかありません。今回の親子ひろしま訪問団では、平和記念式典の参列を始めとして、貴重な体験が多く予定されています。世界で唯一の被爆国の国民として、広島で何が起こったのか理解し、そして後世に伝えていくことが使命であると考えています。

●戦争について深く考えたことがあまりないので、この３日間でたくさん学びたいです。また、戦争を経験した祖父母もいるので、これを機会に話をしたいです。自分は経験していないので「本当の恐ろしさ」はわかりませんが、日本に起こったことなので、しっかりと勉強したいです。

●親として、平和の尊さや命の大切さは常々子どもたちに話しているつもりです。しかし、戦争や原爆投下などで、日本がどんなに過酷な状況に追いやられたのか、人々がどんなに苦しい思いをされてきたのかを、的確に伝えることができません。自分も戦後を経て、経済大国と化した平和な日本の中で生まれ育ってきたからでしょう。「百聞は一見に如かず」今回の訪問団参加で、親子でしっかり見て、学ばせていただこうと思いました。今、当たり前に過ごしている日常のありがたさをかみしめ、戦争に対して断固「NO」と言える毅然とした考えを示せる自分でありたいと思います。

●親子で平和や戦争について学べる場として、とても貴重な体験の場だと思いました。それは、秦野市民の折り鶴を届けるという代表としての自覚を持つことや、平和を願う式典に参列できるということ、さらに、被爆体験された人の声を聴けるという

ことが、一生に一度あるかどうかという貴重な体験だと思ったからです。
仕事柄、現代の子どもたちに戦争や平和について伝え、教えていく立場を考えると、教材の研究にも素晴らしい場だと思いました。多くのことをヒロシマから学びたいと思っています。

●子どもが放射能に興味を持ち、ヒロシマのことを知りたいと思ったため、参加しました。日ごろ、平和について改めて考えることがないので、この機会に再度考え直してみたいと思いました。

副市長表敬訪問（結団式）にて、八木副市長、上幼稚園の皆さんと記念撮影

⑵　訪問後の感想

●今回、広島での平和記念式典に参加する機会を与えていただきましたことに感謝いたします。これから日本の平和がどうしたら続いていくのか考えていきたいです。そのためには、増岡先生のおっしゃっていた「話し合いを通じて何事も解決していくこと」がとても大切なことであると強く感じました。

●広島平和記念資料館の見学では、展示されているお弁当箱などに書かれている文章を読む時間が最後の方は足らなかったです。とうろう流しでは、とうろうの中がろうそくの火だったのでびっくりしました。また、とうろうがどうやって浮いているのかと思ったら、普通に木だったことが驚きでした。とうろう流しを実際に体験して、そして見て、そばで見ても離れた所から見てもきれいだなと思いました。

人々の平和への願いを込めて流されるとうろう

●平和公園の空気。日本全国、海外からも大勢の人が集まり醸し出す独特の雰囲気や、初めて目の当たりにするたくさんの千羽鶴。息子と見る原爆資料館。４３年ぶりの雨の平和祈念式。テレビではわからない式典を支えるいろいろなボランティアの人たち。雨の匂いの中の黙とう。増岡さんの被爆体験談聴講。午後の碑めぐり。原爆ドームの圧倒的な存在感。夜のとうろう流し。

書ききれないほどの体験を受け止め、忘れません。増岡さんはやさしく、笑顔が素敵で別れ際に「しあわせに」との慈愛に満ちたお言葉を何度もいただきました。胸に染み入る言葉でした。

いろいろな体験をさせていただいた私ができることは、小さいことですが、周りの人たちに伝えていくことでしょうか。戦争体験は語れませんが、戦争をしていない日本を維持していくためにも、子どもたちに話をしていきたいと思います。

●増岡さんの話を聞いて、戦争は二度と起こしてはいけない、と強く感じました。広島に落ちた核兵器は、僕の想像をはるかに超えるものでした。一瞬にして人も街も家も奪ってしまったそうです。そのような誰もが苦しむ戦争の恐ろしさは、実際に広島に行って体験しないとわからないことだと思うので、僕はこのことを

広めていきたいです。

また、広島に行く前に僕の担任の先生に「まっ黒なおべんとう」という本を借りていました。そのお弁当は、資料館に本物が展示してありました。本で見たものよりも、焼け跡がはっきりわかり、悲しい気持ちになりました。僕はこの３日間で得た経験をこれからに生かしていきたいです。

真っ黒に焦げたお弁当箱

●全国から、そして全世界から平和を願う人々が集う、ヒロシマの地に行けたことを幸せに思います。６９年前のヒロシマを、資料館の資料から、増岡さんから、そして平和記念公園から、感じることができました。

被爆体験講師の増岡さんと記念に

増岡さんのお話からは、語りつくせない８月６日の出来事、戦争中のつらさ、原爆の恐ろしさが伝わってきました。必死になって逃げた記憶が、今も蘇ってくると話されていました。同じ気持ちにはなれませんが、このような出来事が、二度と起こってはいけないんだということを改めて感じました。

●戦争を体験していない我々が、未来を作る子どもたちに伝えていかなければいけません。どんな学びの場を作って行けばいいのか、考えていく必要があります。今回の学習会で、我が娘も初めて戦争の怖さ、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを学ぶことができたと思います。

石碑に刻まれた言葉や教えていただいた言葉などから多くのことを感じ、これからの生活につなげていきたいと思います。平和な世の中は、自分たちの力で作っていかなければいけないのです。

３日間、貴重な時間をありがとうございました。

●広島に行って、こんなに世界中の人が集まっていることに驚きました。テレビでは日本人を中心に流しているので、現地でしかわからないことだと思いました。たくさんの外国人がヒロシマで起きたことに興味を持っているのに、日本人でそれを意識している人は少ないと思います。３月１０日は東京大空襲と答えられな

い自分に、ハッとしました。普段なかなか戦争のことも平和のことも考えて生活はしていませんが、これを機に１年に一度くらいは思い出すことをしたいと思います。

●被爆体験談講師の増岡さんは素晴らしい人で、とても良いお話が聞けました。二度と戦争を起こさないために「世界中の人と友だちになる」という考えは素敵なことだと感じました。

●広島は暑いと聞いていたので、熱中症対策の準備をしていましたが、式典の当日は台風の影響で雨となりました。あの雨は、被爆者の悲しみの涙ではなかったのかと考えさせられ、心に深く染みわたりました。

●被爆を体験された方々がご高齢で、ご存命の方が少なくなり、「語り部」が減っていると聞きました。一人でも多くの若者に、広島で起こった出来事を「語り部」から聞いた伝承者として、上手に伝える方法はないかと考えています。

●今回、最も印象に残ったことは、被爆体験者の増岡清七さんのお話でした。中学３年の息子は、増岡さんの話に真剣に耳を傾け、ペンをとり、一生懸命集中して要点筆記をしていました。

増岡さんは高校で教師をされていたこともあり、始めに被爆の話をするのではなく、日常のスーパーの買い物での母と子の話を事例として挙げ、現在の平凡な生活がいかに大切なことなのかを子どもたちに認識させてくれました。「もしも自分の大切な人が突然いなくなったら、どうなるのか？考えてごらんなさい。」普段の子どもたちの生活では、考えられないと思います。「人間として生まれて、命は一つしかないのだから、私が助かると同時に周りの人の命も大切にしなければならない」と、非常に重みのある言葉をいただきました。

親子で参加したことにより、戦争と平和について宿泊先や自宅に帰ってからも息子と話す機会が増えました。これからも、この「親子ひろしま訪問団」の事業をずっと続けてほしいと思います。そして、いつまでも、核兵器廃絶と世界の平和を願うばかりです。

静かに平和を訴え続ける原爆ドーム

～「秦野市平和の日」に、八木副市長へ訪問の報告～

秦野市では、市民一人ひとりが改めて平和や命の大切さを考えるため、８月１５日を「秦野市平和の日」と定めました。その「平和の日」に合わせ、８月１５日（金）、市役所にて八木優一副市長に広島訪問の報告を行いました。

始めに、目黒輝夫団長より７月２２日（火）に実施した結団式から、８月５日（火）～７日（木）の３日間の広島訪問までの訪問団事業の報告を行った後、訪問団員の子どもたち５人が一人ずつ、８月６日の平和記念式典に参列した思い出や、平和記念資料館の生々しい展示資料を見て感じたこと、被爆体験談の講師のお話で印象に残っていることなど、広島訪問の感想を発表しました。

被爆地・広島で見て、感じたことを、一人ひとり自分の言葉で報告

「戦争中の大変さ、原爆の怖さがわかった」「２度と戦争を起こしてはならないと思った」「核兵器は作っても使ってもいけないと感じた」「平凡な当たり前の日々こそ平和で、それがずっと続いてほしいと思った」といった子どもたちの報告を受け、八木副市長は、「広島に行く前と後とでは、皆さんの顔が違っていて、大変頼もしく感じます。日本は６９年間、戦争をしていませんが、これから１００年後２００年後も戦争の無い国であるように、皆さんの努力によって平和な国にしていってください。」と話しました。

報告を終え、八木副市長とともに

３　団員名簿

保護者氏名	子 供 氏 名	役　　割
目黒（めぐろ）　輝夫（てるお）	目黒（めぐろ）　流星（りゅうせい） 本町中３年	団　長
小池（こいけ）　勉（つとむ）	小池（こいけ）　茜（あかね） 渋沢小４年	副団長
相原（あいはら）　雅恵（まさえ）	相原（あいはら）　理湖（りこ） 渋沢小６年	監　事
大瀧（おおたき）　美和（みわ）	大瀧（おおたき）　ミチル 南小６年	記　録
大脇（おおわき）　勉（つとむ）	大脇（おおわき）　有優（あゆ） 西小５年	会　計

４　訪問団規約

（名 称）

第１条　この訪問団の名称は、親子ひろしま訪問団（以下「訪問団」という。）という。

（目 的）

第２条　訪問団は、原爆被災地である広島を訪問し、団員自らがその目で戦争の悲惨さを見ることにより、平和の尊さを学ぶことを目的とする。

（事 業）

第３条　訪問団は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

⑴　原爆ドーム等を視察することにより、原子爆弾を始めとした戦争兵器使用による殺りくの悲惨さを学ぶ。

⑵　平和祈念式典に参加することにより、無意味な戦争の否定を決意するとともに、恒久の平和の追求を決意する。

⑶　原子爆弾が投下され、壊滅的な被害を被りながらも希望を持って築きあげられた今日の広島市等を視察することにより、平和の尊さ及び不屈の努力の成果を学ぶ。

⑷　その他目的を達成するために必要な事業。

（組 織）

第４条　訪問団は、公募等の方法による希望者から選ばれ構成される親子５組１０人により組織する。

２　訪問団に、団長、副団長、記録、会計及び監事を置き、それぞれ訪問団員の互選により定めるものとする。

３　団長は、訪問団の事業を総理し、訪問団を代表するものとする。

４　副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行するものとする。

５　記録は、訪問団の事業を記録するものとする。

６　会計は、訪問団の経理を処理するものとする。

７　監事は、会計を監査するものとする。

８　訪問団の事務局は、秦野市くらし安心部市民自治振興課に置く。

（解 散）

第５条　訪問団は、第２条の目的を達成したときに解散するものとする。

（経 費）

第６条　訪問団の経費は、訪問団員の自己負担金、市からの補助金、その他の収入をもって充てる。

（その他）

第７条　この規約に定めるもののほか、訪問団の運営に関して必要な事項は、団長が定めるものとする。

附　則

この規約は、平成７年６月１５日から施行する。

５　資　料

(1)　秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文

◎秦野市民憲章

わたくしたち秦野市民は、丹沢の美しい自然のもとで、このまちの限りない発展に願いをこめ、ここに市民憲章を定めます。

１　平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。

１　きれいな水とすがすがしい空気、それは私たちのいのちです。

１　健康ではたらき若さあふれるまち、それは私たちのねがいです。

１　市民のための豊かな文化、それは私たちののぞみです。

１　みんなの発言で住みよいまちを、それは私たちのちかいです。

この市民憲章は、秦野市の発展を願って昭和４４年１０月１日に制定したものです。

◎秦野市平和都市宣言

私たち秦野市民は、平和への限りない願いをこめて「平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。」と市民憲章に定めた。

私たちの責務は、この精神にのっとり永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り次代へ引き継いでいくことである。

しかし、武力紛争は世界各地で絶え間なく続き、際限のない軍備拡大と核兵器の増強は、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

世界の恒久平和は、すべての人々の切なる願いである。私たち秦野市民は、国際平和年に当たり非核三原則を堅持するとともに、永久の平和とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和６１年３月２７日制定

◎秦野市平和の日制定について

私たち秦野市民は、永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り引き継いでいく精神をうたった秦野市民憲章と秦野市平和都市宣言の理念の下に、一人ひとりがそれぞれの信条や立場を越えて、平和についてともに考え、語り合うことにより、平和への願いを未来に向け継承していくため、ここに「秦野市平和の日」を制定します。

秦野市平和の日　毎年８月１５日

平成２０年６月９日制定

⑵　広島市平和宣言

被爆 69 年の夏。灼(や)けつく日差しは「あの日」に記憶の時間(とき)を引き戻します。1945 年 8 月 6 日。一発の原爆により焦土と化した広島では、幼子(おさなご)からお年寄りまで一日で何万という罪なき市民の命が絶たれ、その年のうちに 14 万人が亡くなりました。尊い犠牲を忘れず、惨禍を繰り返さないために被爆者の声を聞いてください。

建物疎開作業で被爆し亡くなった少年少女は約6,000人。当時12歳の中学生は、「今も戦争、原爆の傷跡は私の心と体に残っています。同級生のほとんどが即死。生きたくても生きられなかった同級生を思い、自分だけが生き残った申し訳なさで張り裂けそうになります。」と語ります。辛うじて生き延びた被爆者も、今なお深刻な心身の傷に苦しんでいます。

「水を下さい。」瀕死の声が脳裏から消えないという当時 15 歳の中学生。建物疎開作業で被爆し、顔は焼けただれ、大きく腫れ上がり、眉毛(まゆげ)や睫毛(まつげ)は焼け、制服は熱線でぼろぼろとなった下級生の懇願に、「重傷者に水をやると死ぬぞ。」と止められ、「耳をふさぐ思いで水を飲ませなかったのです。死ぬと分かっていれば存分に飲ませてあげられたのに。」と悔やみ続けています。

あまりにも凄絶(せいぜつ)な体験ゆえに過去を多く語らなかった人々が、年老いた今、少しずつ話し始めています。「本当の戦争の残酷な姿を知ってほしい。」と訴える原爆孤児は、廃墟の街で、橋の下、ビルの焼け跡の隅、防空壕などで着の身着のままで暮らし、食べるために盗みと喧嘩を繰り返し、教育も受けられずヤクザな人々のもとで辛うじて食いつなぐ日々を過ごした子どもたちの暮らしを語ります。

また、被爆直後、生死の境をさまよい、その後も放射線による健康不安で苦悩した当時 6 歳の国民学校 1 年生は「若い人に将来二度と同じ体験をしてほしくない。」との思いから訴えます。海外の戦争犠牲者との交流を通じて感じた「若い人たちが世界に友人を作ること」「戦争文化ではなく、平和文化を作っていく努力を怠らないこと」の大切さを。

子どもたちから温かい家族の愛情や未来の夢を奪い、人生を大きく歪めた「絶対悪」をこの世からなくすためには、脅し脅され、殺し殺され、憎しみの連鎖を生み出す武力

ではなく、国籍や人種、宗教などの違いを超え、人と人との繋がりを大切に、未来志向の対話ができる世界を築かなければなりません。

ヒロシマは、世界中の誰もがこのような被爆者の思いを受け止めて、核兵器廃絶と世界平和実現への道を共に歩むことを願っています。

人類の未来を決めるのは皆さん一人一人です。「あの日」の凄惨（せいさん）を極めた地獄や被爆者の人生を、もしも自分や家族の身に起きたらと、皆さん自身のこととして考えてみてください。ヒロシマ・ナガサキの悲劇を三度繰り返さないために、そして、核兵器もない、戦争もない平和な世界を築くために被爆者と共に伝え、考え、行動しましょう。

私たちも力を尽くします。加盟都市が 6,200 を超えた平和首長会議では世界各地に設けるリーダー都市を中心に国連や NGO などと連携し、被爆の実相とヒロシマの願いを世界に拡げます。そして、現在の核兵器の非人道性に焦点を当て非合法化を求める動きを着実に進め、2020 年までの核兵器廃絶を目指し核兵器禁止条約の交渉開始を求める国際世論を拡大します。

今年 4 月、NPDI（軍縮・不拡散イニシアティブ）広島外相会合は「広島宣言」で世界の為政者に広島・長崎訪問を呼び掛けました。その声に応え、オバマ大統領をはじめ核保有国の為政者の皆さんは、早期に被爆地を訪れ、自ら被爆の実相を確かめてください。そうすれば、必ず、核兵器は決して存在してはならない「絶対悪」であると確信できます。その「絶対悪」による非人道的な脅しで国を守ることを止め、信頼と対話による新たな安全保障の仕組みづくりに全力で取り組んでください。

唯一の被爆国である日本政府は、我が国を取り巻く安全保障環境が厳しさを増している今こそ、日本国憲法の崇高な平和主義のもとで 69 年間戦争をしなかった事実を重く受け止める必要があります。そして、今後も名実ともに平和国家の道を歩み続け、各国政府と共に新たな安全保障体制の構築に貢献するとともに、来年の NPT 再検討会議に向け、核保有国と非核保有国の橋渡し役として NPT 体制を強化する役割を果たしてください。また、被爆者をはじめ放射線の影響に苦しみ続けている全ての人々に、これまで以上に寄り添い、温かい支援策を充実させるとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう求めます。

今日ここに、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、「絶対悪」である核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向け、世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

平成26年（2014年）8月6日

広島市長　松井　一實

⑶　こども代表「平和への誓い」

わたしたちは、信じることができませんでした。
６９年前の８月６日、この広島に原子爆弾が落とされ、多くの尊い命が奪われたことを。
５歳だった祖父は、「地獄のような光景が今も目に焼きついている。」と語ってくれました。

広島に育つわたしたちは、広島の被害、悲しみ、そして、強さを学びました。
爆風により、多くの建物がくずれました。
家や家族を失い、ふつうの生活がなくなりました。
その中で、
水道は１日も止まることなく、市内電車は、３日後には再び走りはじめました。
広島は人々の努力によって、町も心も復興したのです。

悲しみや苦しみの中で、生きることへの希望を見つけ、生き抜いた人々に感謝します。
当たり前であることが、平和なのだと気がつきました。

ある語り部の方は言いました。
「小さなことからはじめてほしい。」

わたしたちは、もう行動をはじめています。
友達を大切にし、優しく接しています。
家族や被爆体験者から被爆の事実と平和への思いを聞いています。
平和の思いを込めて、毎年千羽鶴を折り、慰霊碑に捧げています。
平和とは何か自分で考え、友達とも意見を交流しています。
平和について考えることで、仲間とつながりました。

わたしたちは、できることからはじめる勇気をもつことができました。

Welcome　to　Hiroshima.
みなさんをここ広島で待っています。

平和について、これからについて
共に語り合い、話し合いましょう。
たくさんの違う考えが平和への大きな力となることを信じて。

平成２６年（２０１４年）８月６日

こども代表　　広島市立牛田小学校　６年　田村　怜子
広島市立尾長小学校　６年　牟田　悠一郎

(4) 広島平和記念公園・周辺ガイドマップ

1. 鈴木三重吉文学碑
2. 旧相生橋碑
3. 中国四国土木出張所職員殉職碑
4. 広島県地方木材統制株式会社慰霊碑
5. 原民喜詩碑（佐藤春夫の詩碑の記）
6. 動員学徒慰霊塔
7. 広島市道路元標
8. 花時計
9. 原爆の子の像
10. 平和の石塚
11. 平和の時計塔
12. 遭難横死者慰霊供養塔
13. 原爆供養塔
14. 平和の鐘
15. 平和の石燈
16. 韓国人原爆犠牲者慰霊碑
17. 被爆した墓石（慈仙寺跡の墓石）
18. 平和の泉
19. 平和乃観音像（中島本町町民慰霊碑）
20. 常夜燈
21. 義勇隊の碑
22. 広島二中原爆慰霊碑
23. 広島市商・造船工業学校慰霊碑
24. 慈母の像
25. 原爆犠牲者国民学校　教師と子どもの碑
26. 平和の像「若葉」（湯川秀樹歌碑）
27. 友愛碑
28. 旧天神町南組慰霊碑
29. 広島市立高女原爆慰霊碑
30. マルセル・ジュノー博士記念碑
31. 朝鮮民主主義人民共和国帰国記念時計
32. 平和の塔
33. 嵐の中の母子像
34. 祈りの泉
35. 被爆したアオギリ
36. 全損保の碑
37. 峠三吉詩碑
38. 「材木町跡」の碑
39. 原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）
40. 平和祈念像（草野心平の詩碑）
41. 菩提樹の碑
42. 平和の灯
43. 祈りの像
44. 旧天神町北組慰霊碑
45. 広島郵便局職員殉難碑
46. 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
47. 平和祈念碑
48. 原爆犠牲建設労働者・職人之碑
49. 原爆犠牲ヒロシマの碑
50. 石炭関係原爆殉難者慰霊碑
51. 広島ガス株式会社原爆犠牲者追悼之碑
52. 広島県農業会原爆物故者慰霊碑
53. 毛髪碑
54. 被爆動員学徒慰霊　慈母観音像
55. 世界のこどもの平和像
56. 平和記念ポスト
57. 平和の池
58. 「平和の祈り」句碑
59. ローマ法王平和アピール碑
60. ノーマン・カズンズ氏記念碑
61. 平和の門
62. 原爆ドーム

平成２６年度親子ひろしま訪問団
訪問の記録

編集発行　秦野市くらし安心部市民自治振興課
〒257-8501 秦野市桜町１－３－２
TEL ０４６３－８２－５１１８

平成26(2014)年１１月